教員の意欲向上へのアプローチ
－授業力向上へのコンダクト－

所属校：墨田区立押上小学校
氏　名：磯　野　智　博
派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：意欲向上・動機付け・かかわり・先輩教員

Ⅰ　研究の目的

2006 年の国際的な学力調査（ＰＩＳＡ）の正答率の低下は､マスコミ等で連日取り上げられるようになり、学校ではこれまでの教育を見直すきっかけになった。そのため、多くの保護者が教育に対しての不安感を高めることにつながった。保護者の教育に対する関心の高まりは、子どもに「確かな学力」をつけさせて欲しいという学校への要求につながり、この要求は、若手教員にも同様に突きつけられることが多く見られるようになった。

大阪大学の小野田教授の保護者対応に関するアンケート調査によると、親の学校への要望や苦情の内容について「大いに変化を感じる」との回答が 59%、「少し変化を感じる」が 35%と、９割以上もの学校関係者が変化を感じていると回答した結果が出た。増えた時期は、1990 年代後半以後からだとの報告があった。教員の訴訟保険加入者も、2000 年度は 1300 人であったのに対し、2007 年度は 16 倍以上の 21800 人になっている。そのことからも、いつ保護者に訴訟を起こされるか分からないと教師たちがおびえていることが分かる。このことから、現在の学校現場では、教員が自信をもって教育活動にいきいきと取り組みにくいこととととらえることができる。

このような状況の中で、若手教員の授業力を向上させていくためには、若手教員が自信をもって、教育活動に意欲的に取り組めるよう支援していくことが大切である。そこで、本研究では、児童の授業後の振り返りから児童の変化を感じ取り、授業に創意工夫を取り入れていくことにした。また、若手教員が自ら計画した授業改善計画にそって、支援や助言を行う。そのことから、教員の授業への意欲が向上し、その結果自発的に授業改善を行うことを研究の目的とすることにした。

副題にある『授業力向上へのコンダクト』とは、本研究は授業力向上へのきっかけとし、授業力向上への触媒にあたる部分であり、授業力向上を直接的な目的にしていないことから、導きを意味するコンダクトという言葉を使用している。

Ⅱ　研究の方法

１　基礎研究（先行研究の分析・文献による理論研究）

先行研究から、若手教員への指導、助言の方法、若手教員とのかかわり方についての実践例の調査、若手教員の意欲を向上させる動機付けに着目した。

文献研究から、内発的動機付け、外発的動機付けの教育現場での動機付けの有効性と課題を探った。外発的動機付けは､一時的な効果があるが､継続性がなく、内発的な動機を失うこともあり、適度な外発的動機付けから内発的動機付けに移行することによって、意欲向上につながるのではないかと考えた。

２　実践研究

(1) 授業力の分析

対 象 者：①　教職経験２年目の教員２名
　　②　対象教員の担当する学級の児童

調査内容：

(教員) ①　現在の自分の課題
　　②　児童の学力向上のため、自分はどのような授業をしていきたいか
　　③　目標達成のための手だて
　　④　好きな教科、嫌いな教科

(児童) ①　勉強は好きか、嫌いか
　　②　好きな教科とその理由
　　③　嫌いな教科とその理由
　　④　学校の勉強は役にたったことはあったか
　　⑤　どんな授業をしてほしいかとその理由

(2) 毎回の授業後の児童への振り返り調査

調査内容：①　今日の授業ではどんなことを勉強したのか（またはわかったか）
　　②　今日の授業の続きで、これから学びたいことや知りたいこと
　　③　その他（教員からの確認問題など）

(3) 若手教員への授業支援

児童からの授業後の振り返りカードを分析し、グラフ資料を作成。資料を提示しながら、授業の中で若手教員が疑問に思ったことや授業をしながら感じたことに従って、助言していく。話し合いでは、若手教員の自己決定を大切にし、意欲の向上を促していく。若手

教員が授業で悩んだことや進め方や発問などの授業の進め方など知りたいことを中心に進め、こちらから一方的に授業技術や資料の押しつけは行わない。

(4)授業改善支援

毎月、授業実践の振り返りを行い、若手教員が一ヶ月の取り組みの成果と課題を振り返る。その際、振り返りの資料として、単元を通した児童の授業振り返りシートを分析したものを提供する。若手教員が児童の実態から感じたことと、資料から見取ったことなどから、次の月に重点をおいて授業を行うことを決める。こちらからは、資料を提供するだけで、方針を決めるのは若手教員である。

Ⅲ　研究の結果

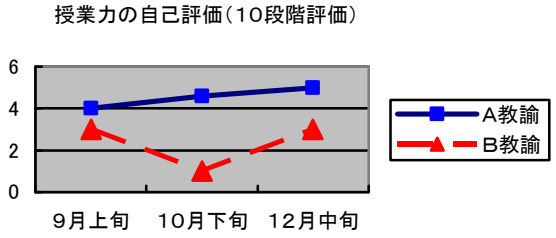
１　A教諭

９月の児童へのアンケート結果の分析と話し合いから、生活班を基盤とした３～４人の小集団を活用し、調べ学習や学び合いの活動を意識的に取り入れた。その結果、いつもの授業では、なかなか全体で自分の意見を発表できない児童が、３～４人の小集団の中では発表することができた。児童の変容から、高い意欲をもつようになり、授業を参観した社会、算数以外にも、A教諭が自主的に体育のチーム分けや生活班の編制でも、人間関係や班活動、話し合い活動を意識して行い、多くの授業で取り組むようになった。

２　B教諭

授業の中で、全員が必ず１回は発言することを目標に今までも授業をしてきた。しかし、座席の前から順番に指名していくなど指名計画をしていなかったために、実際に指名されても答えることができずに自信をなくしたり、授業のまとめの部分で子どもの言葉でまとめられずに教員がまとめてしまったりしていた。そこで、指名計画をたて、児童一人一人の理解に合わせた指名を行うようにした。その結果、今まで以上に授業で児童が答えられるようになり、授業に積極的に取り組むことができるようになった。児童の変容から、机間巡視での児童の理解の確認、児童の理解に応じた発問の工夫などに積極的に取り組むようになった。

３　授業力



A教諭とB教諭に自分の授業力がどれくらいなのかを10段階評価で自己評価をしてもらった。結果は、前記のようになった。授業力の自己評価については、A教諭は上昇しているが、B教諭は一度下がってから上がっていることがわかる。これは、話し合いの中で、A教諭は児童の変容から授業力を考え、自分の授業への取り組み方が変わったことなどをふまえて評価し、B教諭は児童の反応から授業での自分の足りない部分を感じることによって、授業力を低く評価した。B教諭によると、９月の「３」と10月下旬の「１」は自分の授業を見る目が向上したことと、自分の中での評価基準が違うとのことだった。授業力としては、指名の活用法を学んだり、授業の流れを意識したり、授業力そのものは９月より10月、10月より12月の方が向上しているとのことだった。このことから、若手教員が授業に対し、自信をもてるようになってきたということができる。

授業への取り組む姿勢にも変容が見られた。最初は毎回の授業の振り返りカードは、授業参観している日のみ使っていた。10月より、実践している教科に関しては、参観していない日にも振り返りカードを活用し、分析をお願いされるようになった。また、次第に教科を変えて実践したいと申し出があったり、実践していない教科で自主的に活用し授業評価に活用したりするなど、授業への取り組み方に変容がみられるようになってきた。授業への取り組み方の変容が、児童の変容に表れることもあり、児童の変容からも教師の授業に対する意欲は継続して高まった。授業後の振り返りで児童を見る視点を変えてあげることによって、児童理解が深まり、授業の視点が教師の技量から、児童中心へと変化が見られた。

Ⅳ　考察

下記のようなかかわり方をすることによって、若手教員の意欲向上の効果を期待することができる。

１　授業を教師の技術や技能のみだけでなく、児童に視点を変えて見ることによって、授業を多面的に振り返ることができる。そのことによって、教師は自信を失うことなく、意欲をもち続けることができる。

２　若手教員の自発的な疑問や悩みに即して助言や支援を行う。先輩教員の判断で、若手教員の意向を無視して授業改善の方針を決めたり、求められていない助言をしたりはしない（主体性を尊重する）。

３　授業の振り返りは、直接問題点を指摘するのではなく、児童のよりよい学びや変容を共に求める観点で、話し合いをしていく。